

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



Vol.18
2006
SPRING



ゴメリ医科大学学生とのネット交流会



- | | |
|-------------------|-------------------------------------|
| Report | アニメ映画「アンゼラスの鐘」上映会・ゴメリ医科大学学生とのネット交流会 |
| Report | 第2回日韓原爆被爆者医療セミナーを開催 |
| From Korea | 韓国から医師等を招聘 |
| From Korea | 被爆者医療研修を終えて… |
| Report | WHO・長崎大学共催国際セミナーに参加して… |
| Information | NASHIM研修機関紹介 2 日本赤十字社 長崎原爆病院 |

アニメ映画「アンゼラスの鐘」上映会 ゴメリ医科大学学生とのネット交流会

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)は、被ばく者医療に関する国際協力の必要性や放射線についての理解を深めてもらうため、毎年夏に講演会やシンポジウムなどを開催していますが、平成17年9月23日に被爆60周年事業として、被爆直後の長崎で救援活動に尽力した医師秋月辰一郎さんの奮闘を描いたアニメ映画「NAGASAKI 1945～アンゼラスの鐘」の上映会とインターネット会議システムを利用したゴメリ医科大学との交流会を長崎原爆資料館で開催しました。



ゴメリ医科大学学生とのネット交流会

会場に市民約200人が訪れ、熱心に映画を鑑賞していただきました。「大人にも子供にもわかりやすく作

られており、原爆を知らない私にも原爆の恐ろしさ、その後のたいへんさがわかりました」「二度とこのようなことが起きてはならないと改めて思いました。涙なしには見るのでできない映画でした」といった感想が寄せられました。

また映画上映後のゴメリ医科大学との交流会ではインターネット会議システムを利用して行われましたが、このシステムはもともと、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館において、被爆者体験を全国に発信するために利用されているシステムで、現在全国の小中学生などに被爆者の体験談を聞いてもらうために活用されています。今回はこのシステムを利用して、長崎とベラルーシ共和

国のゴメリ医科大学を結び、リアルタイムでの交流会を初めて実施しました。

ベラルーシ共和国のゴメリ州はチェルノブイリ原子力発電所の事故で最も大きな被害を受け、多くの甲状腺がん患者が発生した地域ですが、ここに設立されたゴメリ医科大学はヒバクシャの医療を行う医師の育成を主な目的として設立された大学です。この医科大学には、事故の影響で小児期に甲状腺がんになり、手術を受けながら、その後自ら医師になることを志して勉強している医学生が数名います。今回は、これら医学生にゴメリから交流会に参加してもらい、長崎市民との対話を行いました。

長崎からは、小、中、高校生や大学生、さらには社会人がパネリストとして壇上に上がり、インターネットを通じた画面を見ながら、ゴメリの医科大学生にチェルノブイリについての疑問点などの質問を行いました。初めての試みで画像も鮮明とまではいきませんでしたが、原発事故の被害にあって甲状腺がんの手術を受け、現在は医師になるため医学部で学んでいる学生の生の声は、日本のパネリストにも深い印象を与えたようです。

NASHIMでは、今後もこのような交流の場を通じて、市民の方に世界のヒバクシャについて知ってもらい、長崎から医療支援、情報発信していくことの大切さを肌で感じていただきたいと思います。



来場者アンケートより

●「アンゼラスの鐘」上映会感想

感動し、言葉ありません。多くの小中高生に見てほしいと思います。(70歳代 男性 無職)

本を読んだ時よりも画像の方が訴える力があると思いました。(40歳代 女性)

原爆の被害・被災といったものをもう少し深く掘り下げても良かったのではないかと思います。(30歳代 女性 会社員)

涙、涙、涙、、、、(50歳代 男性 自営業)

素晴らしいアニメ映画だと思います。戦争を知らない子供たちには必ず見せたいと思います。現実をもっとむごかったということもつけくわえてほしい。(60歳代 男性 無職)

普通当たり前に行えることが、この時代ではできないというのがとてもかわいそうだった。とってもよかった。映画の中で「どんなことがあっても必ず生き抜いて見せる。」という言葉が印象に残った。(女性 中学生)

被爆後の放射線の影響がものすごく分かりやすく表現されていて、ビックリしました。(女性 高校生)

原爆が投下された時の爆風の音とか、吹き飛ばす様子がとてもリアルでした。(女性 高校生)

原爆の怖さを伝えていく方法としてとても良いツールだと思います。(50歳代 男性 公務員)

●ベラルーシ共和国ゴメリ医科大学学生との交流会感想

チェルノブイリで被ばくした子供たちが大学生になり医学を勉強している姿が印象的でした。(50歳代 女性 無職)

チェルノブイリ原発事故は今でも放射線被害がその土地に多く残っていて、ドームのようなものでさらに包む計画があるなど初めて知りました。(30歳代 女性 自営業)

医学も原爆も科学技術で作られたという講演の言葉が印象的でした。(女性 高校生)

人を救う医療現場も人の手であれば核兵器を生み出すのも人の手。科学の進歩が生み出す人類の幸福と、人類の破壊にもつながっているということが印象的でした。(50歳代 女性)

Report

専門家派遣

第2回

日韓原爆被爆者 医療セミナーを開催



ソウル赤十字病院で日韓原爆被爆者医療セミナーを開催

被爆者に対する相互理解と被爆者医療の進展を図るため、韓国に12月と3月に専門家を派遣し、韓国の医療関係者たちとの意見交換や病院等の視察を行いました。このうち12月に開催した第2回日韓原爆被爆者医療セミナーについて報告します。

12月12日と13日、大韓赤十字社のソウル赤十字病院と大邱赤十字病院で「第2回日韓被爆者医療セミナー」を開催し、長崎大学医学部・歯学部附属病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センターの大津留晶助教授と長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設 生体材料保存室の中島正洋講師が講演を行いました。

まず、ソウル赤十字病院では金漢善病院長の挨拶後、大津留助教授が「がん遺伝子治療の研究開発」というテーマで講演しました。講演の冒頭、永井隆博士や「国際ヒバクシャ医療センター」の説明もありました。次に中島講師が「長崎原爆被爆者の重複癌」というテーマで講演し、被爆後60年を経てもなお、非被爆者より高い率で被爆者に癌が発生しているという話に、80名の出席者は興味深そうに聞き入っていました。

大邱赤十字病院では大学で講義のため欠席された権永在病院長に代わって李珍雨診療部長が歓迎の挨拶をされた後、中島講師が「長崎原爆被爆者の重複癌」というテーマで講演しました。続いて大津留助教授が「韓国人原爆被爆者の健康相談事業に従事しての所感～より良い相談事業のために～」というテーマで講演を行いました。長崎県と長崎市が国の補助を受けて昨年度から韓国で実施している在韓被爆者の健康相談事業に参加しての感想ということで、相談会場となった大邱赤十字病院の医師や看護師等の他に、会場で被爆者のお世話をしてくれたボランティアたちの出席もあり、30名の出席者たちから熱心に講演を聞いていただきました。

中島正洋講師の話：「韓国の医師と接して感じたことは、実際に医療に役立つ情報の提供を期待している、ということです。その点で日本人医師による在韓被爆者検診や健康相談は非常に好意的な評価をなされていて、被爆者医療セミナーへの期待感も大きいのではないかと思います。」



大邱赤十字病院で日韓原爆被爆者医療セミナーを開催

韓国での訪問先

12月12日～13日

ソウル赤十字病院
嶺南大学附属病院
大邱赤十字病院

3月2日～3日

大韓赤十字社特殊福祉事業所
ソウル赤十字病院
大邱赤十字病院
大韓赤十字社陝川原爆被害者福祉会館
慶尚南道陝川郡保健所
陝川高麗病院

2005年度 専門医師等韓国派遣者名簿

回数	派遣期間	所属	職名	姓名
第1回	12月12日～12月14日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院	国際ヒバクシャ医療センター 助教授	大津留 晶
		長崎大学原爆後障害医療研究施設	生体材料保存室 講師	中島 正洋
		長崎・ヒバクシャ医療国際協力会	事務局 書記	草場 里見
第2回	3月1日～3月4日 (4日間)	日本赤十字社長崎原爆病院	呼吸器科部長	福田 正明
		長崎大学原爆後障害医療研究施設	分子診断研究分野 助手	岩永 正子
		財団法人 放射線影響研究所	臨床研究部 研究員	今泉 美彩
		長崎・ヒバクシャ医療国際協力会	事務局 書記	草場 里見

韓国から医師等を招聘



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を視察

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、韓国から10月と12月、2月に在韓被爆者の援護事業を実施している大韓赤十字社などから、医師等6名、事務職員6名の計12名が来崎しました。

研修者一行は長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館をはじめ、平和公園や、原爆落下中心地、永井隆記念館などを見学しました。

その後、長崎県医師会を訪問してナシム会長である井石哲哉県医師会会長と懇談し、日本と韓国の保険医療の違いなどについて意見を交わしました。また、県庁では職員から原爆被爆者行政の説明を受け、熱心に質問をしていました。研修二日目からは、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」、長崎大学医学部・歯学部附属病院、長崎大学原爆後障害医療研究施設で研修や視察を行いました。

長崎大学医学部・歯学部附属病院の病理部で研修を受けた居昌赤十字病院の安讚臨床病理室長は、「わが病院では病理組織検査の結果が出るのが遅いと不満を言われることもあるが、長崎大学病院ではとても早いのでびっくりした。韓国へ帰って関係者に説明したい。」と感想を述べました。



江口勝美 長崎大学医学部・歯学部附属病院長を表敬訪問



井石哲哉 NASHIM会長を表敬訪問

2005年度 韓国人医師等被爆者医療研修者名簿

回数	研修期間	所 属	職 名	姓 名	姓 別
第1回	10月16日～10月22日 (7日間)	仁川赤十字病院	病院長・外科科長	チヨウ・スンヨン 趙 承衍	男
		ソウル赤十字病院	内科医師	ノ・チャンソク 魯 昌錫	男
	10月16日～10月20日 (5日間)	大韓赤十字社 災難救護奉仕本部	保健教育担当	パク・チヒョン 朴 智賢	女
		大韓赤十字社 特殊福祉事業所	原爆担当	ユ・ナムン 柳 志恣	男
第2回	12月4日～12月10日 (7日間)	ソウル赤十字病院	家庭医学科科長	キム・ウンテ 金 殷泰	男
		慶尚南道陝川郡保健所	公衆保健医師	パク・テジン 朴 大進	男
	12月4日～12月8日 (5日間)	ソウル赤十字病院	医事課係長	ファン・ドソプ 黄 斗燮	男
		大韓赤十字社	原爆担当	パク・ビョンヒ 朴 炳熙	男
第3回	2月19日～2月25日 (7日間)	ワレス記念浸礼病院	影像医学科科長	イ・ジエソク 李 在鉞	男
		居昌赤十字病院	臨床病理室長	アン・チヤン 安 讚	男
	2月19日～2月23日 (5日間)	大韓赤十字社 特殊福祉事業所	所長	ウォン・ジョンボ 元 鍾寶	女
		大韓赤十字社 特殊福祉事業所	原爆担当	オ・サンウン 呉 尚恩	女

被爆者医療研修を終えて…



大韓赤十字社ソウル赤十字病院
家庭医学科科長 金 殷泰

七日間の原爆被爆者関連の医療研修に参加したソウル赤十字病院 家庭医学科科長の金殷泰です。

説明をお聞きしながら、日本政府の原爆被爆者に対する体系的な管理及び支援に深く感銘を受けました。

個人的には初めての日本訪問ということで、最初は緊張感が大きかったです。しかし、現地の通訳からNASHIM会長様に至る皆様の細心な御配慮のお陰で、緊張感はなくなり、いつの間にか親密感まで感じるようになりました。



放射線影響研究所を訪問



恵の丘長崎原爆ホームを視察

最後に、七日間の研修期間中に我が家のように心くつろげる雰囲気の中で接してくださった皆さんに心から感謝しながら、今後とも、韓国に居住している原爆被爆者に対してもより一層の積極的な関心や支援をお願いします。

ありがとうございました。

今回の研修に参加する前は、原爆被爆に関して、知っている知識というのがほとんどありませんでした。しかし、原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館、爆心地公園、平和公園などを見学しながら、原爆のとてつもない威力、それによる深刻な被害、原爆に遭われた生存者たちの人生における逆境や後遺症などについて知るようになり、驚愕に耐えませんでした。また、原爆の被害に遭った生存者に対して憐憫の情を催すだけでなく、もっと被爆者に対する細心な配慮が必要であることが分かりました。

日本赤十字社長崎原爆病院及び長崎大学医学部・歯学部附属病院、放射線影響研究所、恵みの丘、かめだけ等を視察し、また、長崎県庁で原爆被爆者行政に関する



原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」を視察

Report

WHO・長崎大学共催国際セミナー に参加して…

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
公衆衛生学分野 助教授 高村 昇



長崎大学から寄贈された桜の木の前にて。
左から兼松長崎大学医学部長、
下田長崎大学医学部・歯学部附属病院看護部長、
齋藤長崎大学学長

平成17年9月9日、スイス連邦ジュネーブの世界保健機関(WHO)で長崎大学とWHOが共催するセミナーが開催されました。これは、原爆被爆60周年という節目の年に当たって、長崎や広島の被爆者への健康影響を、WHOという国際機関で世界にアピールすることで、放射線被ばくの実態、さらには平和の重要性について認識することを目的とするもので、現在WHOに専門官として派遣されている長崎大学の山下俊一教授が中心となって企画、準備されたものです。当日は長崎、広島などの日本の専門家に加えて、WHOの専門官やジュネーブの国際機関の関係者、さらにはアメリカの研究者などが参加し、NASHIMからは長崎大学医学部長の兼松隆之先生と日赤長崎原爆病院の進藤和彦先生が参加されました。

会議の冒頭では、長崎大学の齋藤寛学長が長崎原爆によって多くの一般市民が一瞬のうちにその命を奪われたことを紹介するとともに、長崎、広島において60年間に渡って行われてきた被爆者医療、さらには国際ヒバクシャ医療協力を紹介し、平和の尊さをアピールされました。また、放射線影響研究所や放射線医学研究所といった、日本の放射線医学研究施設の代表者からは、被爆者医療、放射線影響研究に関するこれまでの取り組みについての報告がなされ、さらに長崎大学、放射線影響研究所やアメリカがん研究所の専門家からは、これまでに蓄積された被爆者の健康影響についてさまざまな観点からの報告が行われました。WHOの専門家からは、放射線災害に



WHOの李事務総長(右)と談笑する齋藤学長

対する国際機関の取り組みと今後の課題などが報告されたほか、レントゲンやCTといった放射線を用いた診断機器に関する国際的な現状等について、報告がありました。最後に質疑応答になり、今後、長崎大学を始めとする日本側とWHOが、放射線の健康影響解明や緊急被ばく医療、さまざまな放射線関連研究などの幅広い分野で積極的に連携することが確認されました。

また当日は、WHO会議場のロビーでNASHIMのポスター展が開催されました。長崎における原爆被害の実態や、NASHIMがこれまで行ってきた活動の報告などを掲載したポスターを、会議参加者が熱心に見学していました。WHOと長崎大学の共催による会議において、NASHIMの活動を広く紹介できたことは、非常に意義があったと考えています。



NASHIMのポスターを熱心に見るセミナー参加者

WHO前の庭園には、長崎大学が寄贈した桜の木が植樹され、桜の花がWHOの春の風物詩になるのも近そうです。同時に、今後NASHIMやその関連機関がWHOのような国際機関と密接に連携することで、より効果的な国際ヒバクシャ医療支援が行えることが期待されます。



レマン湖の大噴水。高さ140mにも達する大噴水は、ジュネーブのシンボリック的存在。



セミナーの成果について、マスコミの取材に答える
山下教授(WHO専門官)

NASHIM研修機関紹介 2

日本赤十字社 長崎原爆病院

長崎原爆病院は、広島・長崎に投下された原子爆弾によって、多くの肉親を失い、自らの放射能障害と闘っている原爆被爆者に対し、その健康上の特別の状態に鑑み、日本赤十字社が赤十字の人道的任务を達成する目的で、国、県、市の協力のもと、昭和33年5月20日病床数81床で片淵町に建設し、長崎市の運営で開院しました。また、昭和37年1月5日に、より充実した被爆者の診断治療と健康の保持、向上を図ることを目的として、原子力放射能障害対策研究所を開設し、昭和44年4月1日に長崎市から日本赤十字社に移管されて日本赤十字社長崎原爆病院と名称変更しました。その後増改築を重ね、診療部門も充実整備されがん診療施設等も有する総合病院として被爆者医療に研さんしてきましたが、開設以来20有余年を経過し、近年の医療需要の増大と疾病の多様化等に対処するためには、既存の施設では、敷地、建物共に狭隘となり、被爆者等の強い要望もあり、国、県、市並びに被爆者団体等関係各機関の協力的な支援を得て、昭和57年12月12日、現在地・茂里町に病床360床、地下1階地上7階建、総工費約45億円をもって新病院が完成し、片淵町より移転しました。新病院の特色は、被爆者の高齢化に対応するリハビリテーションの強化とがん診療施設の充実並びに重症患者用個室の整備です。



標榜科目12科の近代医療を整備した中核機能病院として、被爆者の医療、健康管理、更に後遺症の研究とともに、輪番制第2次救急医療機関として、平成12年2月より救急告示病院の認定を受け地域医療活動にも積極的に参加し、平成14年度は、救急医療の充実を図るために、救急センターの改修を行っています。同年12月に長崎県地域がん診療拠点病院に指定され、質の高いがん医療を提供する体制を確保するとともに、地域の医療機関と緊密な連携を図り、また必要ながん医療に関する情報提供を行うことにより、地域全体における医療水準の向上に努めています。

またNASHIMに参加し、韓国及びチェルノブイリ・カザフスタン関連医師等の研修受入や韓国へ医師・看護師の派遣を行っております。その他、在南米被爆者診断事業ではブラジル、ボリビア、アルゼンチン、パラグアイ、ペルーの5カ国に医師を派遣、在韓被爆者健康診断・健康相談事業では医師、理学療法士を派遣するなど、国際協力にも積極的に参加しています。



大韓赤十字社の病院医師等が当病院を視察